（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　田口　卓臣

１８世紀啓蒙主義の金字塔である『百科全書』の刊行を責任編集者として推進したディドロは、「哲学者」すなわち啓蒙思想家として、哲学、自然学、演劇、美術批評、政治経済論など様々な分野で多彩な文筆活動を展開したが、それと並行してフィクションの創作にも力を入れ、多数の小説を書き残し、それは現在ではフランス１８世紀文学を代表する位置を占めている。本論文はその小説作品の全体を対象として取り上げ、個々の作品に綿密かつ繊細な分析を加えることを通じて、ディドロの人間学と政治学（共同体に関する考察）が、どのように彼の小説作品の方法を導き、逆に彼の小説作品の語られ方と内容世界が、いかに彼の人間認識・世界認識を反映すると同時に規定しているかを明らかにすることを目指す。

論文は三部からなり、第一部では、彼の小説における語りの構造、物語の起承転結、作品世界の設定について、各作品に即した形で論ずる。そしてこの考察を通じて、彼の小説作品のうちには一貫して、特権的な話者の不在及び作品世界の俯瞰不可能性という二つの特徴が見られることを明らかにする。第二部では、各作品の物語内容、人物造形、比喩、描写を吟味することによって、ディドロの人間観をより詳細に検討する。それを通じて、彼が全知の神の視点が不可能であることを肝に銘じて、個としての人間の抱えるさまざまの限界を描き出していることを示す。具体的な論点は、⑴認識や判断のレベルにおける決定的な解答の不在、⑵意志による人間――自分と他者――の統御の試みとその限界、⑶人間の限界を見据えることから生ずる作者ディドロの思想の肯定性の三点である。第三部は、第二部と同様のアプローチによって、共同体及び共同体との関係で捉えられた個人をめぐるディドロの思索の軌跡をたどる。論点は、⑴性愛の可変性と一夫一婦制の関係、⑵一夫一婦制のオルターナティヴとして構想される人間関係あるいは共同体のはらむ問題の二点であり、その検討を通じて、あらゆる既存の共同体の限界を顕在化させるディドロの思考を浮き彫りにする。論者は、ディドロの小説作品の特徴が、つねにユーモアと肯定性を失うことなく、自己自身を含めたあらゆる人間の限界を徹底的に表現しようとする方法にあることを強調して論を締めくくる。

本論文の独創性は、ディドロの思想を彼の作品から抽出して論者の言葉で解説するのではなく、その思想が小説作品の形式と内容をどのように導き、作品の中でどのように働いているか、そしてそのようにフィクションに受肉された思想が、どのような美学的・イデオロギー的効果を生み出すかを作品に即して明らかにするところにある。そのために啓蒙思想家としてのディドロの思想の積極性・独自性が必ずしも明らかに示されない憾みがあるが、文学の特質が理論体系の枠組みからこぼれ落ちるものを掬い取るところにあるとすれば、本論文は文学研究としてきわめて新鮮でしかも着実な成果を挙げていると言える。以上から審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。